

マルティネルの街角で

YKI 国際特許事務所 弁理士◇葦原 エミ

Vol. 4 くおりてい・おぶ・らいふ

それは夏のスイスでの出来事。キレ者弁護士のA氏との楽しいランチ。子どもの話になると、途端に“マイホーム・パパ笑顔”になって、iPhoneの待ち受け（子どもとネコ）を見せてくれる。まあスイスだし、家にはペットがたくさんいるだろう。

筆者：「ペット、飼ってるの？」（想定問答：ネコとイヌ、2匹ずつ→ええっ、そんなにいっぱい〜？）

A：「うん！ 馬がいる！」

筆者：「ウマあ？？？」

ペットの定義を頭の中で再構築しながら歩いていたら、橋の上で水着ではしゃぐ大学生と思しき集団を発見。

筆者：「おおー、スイスじゃ橋から飛び込んで、川で泳いでもいいんだね、へ〜」

A：「オレンジ色の袋を引っ張って泳いでる人に見える？ 袋の中身はスーツなんだ。夏はああやって、オフィスまで泳いで行く人もいるよ！」

このへんで、「参りました、降参！」状態になる。そう！ こういう、何気ない“日常会話”で、なのだ。筆者が「この人たち、住んでる世界が違う！」と衝撃を受けるのは。

「外国なんだから、そりゃ、生活も違うさ」と頭では分かっている。が、遠方の地にも瞬時にメールが届く今日、「出願してください」「異議、申し立てます」みたいな会話を普通にしている（つまり同業の）自分のコンタクト・パーソンが、日ごろ、馬に乗り、橋からダイブして川を泳ぐ（またはそれをさほど特別とは思わない）なんてトコは、普段全く想像していない。

でも、“現実”は違う。大都市からほど遠からぬ街で、そのへんに牛が「モ〜♪」といて、羊が「メ〜♪」と草をはみ、教会の鐘が15分ごとに街中に響き渡る。緑豊かな川沿いで心地良いせせらぎを楽しみながら、職場へと向かう。電車に乗れば、70代ぐらいの女性が登山姿で1人、2人、アレ？ もっといる！ 彼らにとっての「現実」が、私にとっては「驚き」（なのが、かなり悔しい……）。

「くおりてい・おぶ・らいふ」なんて言葉が、絵空事のように平仮名で頭に浮かぶ。



※ 撮影協力：デリリウムカフェ+キョー（霞が関）

次に訪問したB氏のオフィス、「職場は起きている時間の3分の1を過ごす所」を再認識。

会議室(!)に、半裸でまどろむ若き女性の、ちょっと幻想的な現代アートを発見。

B：「若いアーティストを応援していて、私のコレクションなんです」

ああ、我がオフィスもかくありたい。「日本だったら、あり得ないでしょ」と思った筆者が無粋過ぎると恥じた。

時は流れて、冬のスイス。

「その『丘』まで散歩に行こう」と友人に誘われ、ルンルン♪で出掛けた。が、「いや、コレ、軽〜く普通に『雪山』でしょっ！」

防寒服で完全武装した赤ちゃんを乗せたベビーカーを押す若きママが、ゼーゼーと息をあげて「山道」を「登る」筆者を追い越していく。しかも携帯をイジりながら……。

「この赤ちゃんはどんな人生を歩んでいくんだろう。まあいいや、とりあえず帰国したらジムで体を鍛えるんだっ！」と丘での散歩に苦戦するのであった。

~ Fin ~